

教科科目フリー型総合問題を用いた モニター調査の分析

研究開発部試験臨床研究部門 椎 名 久美子

研究開発部試験臨床研究部門 柳 井 晴 夫

平成8～10年度の共同研究「大学の各専門分野への適性の評価を目的とする総合試験のあり方に関する共同研究」(研究代表者：柳井晴夫)の一部として、情報を問題文中で与えて教科・科目間の壁を取り払うことを目指した問題(教科科目フリー型総合問題)の試作を大学の教官に依頼し、大学1、2年生を被験者としてモニター調査を実施した。本稿では、モニター調査の分析結果をまとめ、教科科目フリー型の問題の特徴を示した。

モニター調査で出題した問題の中には、工学部や文系学部などの特定の学部の受験者を意識して作成されたものもあるが、そのような問題では、被験者の学部系間(文系学部と理系学部)の大問平均得点に有意差が認められ、出題意図と被験者の解答結果の特性が一致する傾向が見られた。ただし、文章を書かせる問題だからと言って、必ずしも文系の被験者が高得点をあげるとは限らず、文章中に書かれた法則を

適用する問題や、与えられた文章を読んで新しい概念を理解するような問題では、学部系間の得点の違いは小さかった。

小問得点データに対して主成分分析を行ったところ、第1主成分の寄与率は低く、各小問で測定される能力が、合計点のような1つの成分では説明しきれないことが示唆された。因子分析を行ったところ、同じ大問に属していても、異なる因子に負荷が高い小問の存在が示された。これは、その大問が、様々な角度からの出題で構成されていることと一致している。

今回のモニター調査で用いた総合問題の中には、科目の知識の有無を直接的には問わない問題も、科目の知識に関連の深い題材が用いられた問題も含まれているが、どちらのタイプの問題でも、関連する教科の高校での履修経験科目数が多い被験者に有利な傾向が一部で見られた。後者のタイプの問題では、測定しようとする能力や資質が、

入学前の履修経験を通じて間接的に身についた可能性がある。また、2つの科目を複合して作成された問題（教科科目複合型総合問題）も同時に実施されたが、教科科目フリー型総合問題の大問得点は、問題を解く際に要求される能力や知識と関連する科目を含む教科科目複合型総合問題の大問得点とあ

る程度の相関を示す傾向が見られた。

教科科目フリー型総合問題の各大問でどんな資質が測定されと感じたかを被験者に挙げてもらったところ、被験者が問題に対して抱く印象が解答形式などの見た目に左右される傾向が示され、出題者が測定しようとした資質とのずれが見られた。